

日本史研究の入門書について

TA 高橋 邦幸

■概 要

今後4年間日本史を勉強していくわけですが、その間レポートやレジュメなどを作成する機会が必ずあります。4年生になると、卒業論文を書かなくてはなりません。これを乗り越えるためには、①論文などを理解できるようになること、②史料を読めるようになることが必要です。そこで、まずは次のような入門書を紹介しますので、ここから歴史研究に入ってくるとよいでしょう。

■入 門 書

【概説】=通史

○日本史リブレット (山川出版社)

第一線の研究者が自分の専門分野を分かりやすく解説しています。ページ数も多くはなく、歴史研究への導入として適しています。石井先生の巻も読んでみて下さい。

・石井正敏『東アジア世界と古代の日本』(日本史リブレット14、山川出版社、2003)

○日本の時代史 (吉川弘文館)

日本史の概説書です。7階日本史学研究室内演習室入り口の横にあります。近年までの研究動向・参考文献・史料なども分かります。発表などのため課題を調べるとき、辞典だけでなく、概説書も参考にするといいでしょう。

【漢文】=古代史

○小川環樹・西田太一郎『漢文入門』(岩波書店、1957)

基礎演習などでみてきた通り、史料のほとんどは漢文です。したがって、漢文の知識があると、強力な武器になります。特に古代史は正格漢文(純粹な漢文)が多いので、漢文が得意だと有利です。ただし、この本は基本を押さえれば十分です。また、『漢文解釈辞典』(国書刊行会)にも解説が載っていますので、これも活用して下さい。私は『漢文解釈辞典』で勉強しました。

○池田温『日本古代史を学ぶための漢文入門』(吉川弘文館、2006)

論文集に近く、初学者向けではありませんが、古代の漢文史料を読むために知っておくといふことが書かれています。

【古文書・古記録】=古代史・中世史

○佐藤進一『[新版]古文書学入門』(法政大学出版局、2003)

【必読】日本古文書学の泰斗たいとによる有名な入門書です。詔勅・太政官符・下文くだしぶみなど様々な古文書の読み方・様式が分かります。取り上げる史料は古代・中世がメインです。

○飯倉晴武『古文書入門ハンドブック』(吉川弘文館、1993)

初学者向けの入門書です。基礎用語や文書の取り扱い方などから分かりやすく解説され

日本史学基礎演習（1）

ています。取り上げる史料は中世がメインです。『[新版] 古文書学入門』より易しいので、『[新版] 古文書学入門』が難しいと感じたら、こちらから読むといいです。

○高橋秀樹『古記録入門』（東京堂出版、2005）

公家日記・記録体きろくたいを読みたい人に適しています。記録体は変体漢文へんたいかんぶん（日本風に変化した漢文）の1つで、平安時代以降、公私の記録・文書に用いられた文体です。日記（『小右記』・『玉葉』など）だけでなく、書簡や『吾妻鏡』にも使われています。平安貴族や鎌倉時代について勉強したい人は読んでおくとよいです。

【くずし字】 = 近世史

○児玉幸多『くずし字解説辞典』（東京堂出版）

○児玉幸多『くずし字用例辞典』（東京堂出版）

近世史をやりたい人は必携の辞典です。くずし字解説の入門書はいろいろあるので、自分に適したものを買って下さい。ここでは、解説に必要な2冊の辞典を紹介します。

【考古学】 = 考古学

○鈴木公雄『考古学入門』（東京大学出版会、1988）

考古学をやりたい人は読んでおくとよいです。

【民俗学】 = 民俗学

○福田アジオ・宮田登『日本民俗学概論』（吉川弘文館、1983）

【入門的な史料集】

○『史料による日本の歩み 古代編』（吉川弘文館、1960）

○『史料による日本の歩み 中世編』（吉川弘文館、1958）

○『新版 史料による日本の歩み 近世編』（吉川弘文館、1996）

○『史料による日本の歩み 近代編』（吉川弘文館、1951）

返り点や読み・送り仮名が付されているので、これで史料の読み方などを身に付けて下さい。読み方に慣れることも重要ですが、単に読むだけではなく、なぜそう読むのかを考えるといいでしょう。白文で読めるか試してみてください。